

今井 忍

## 0 はじめに

本稿は、Lakoff(1987)とLangacker(1987/1991)で提唱された認知意味論の枠組みを用い、いわゆる複合動詞構文<sup>1</sup>の後項として使われる「～出す」の起動の意味が単独用法の意味とどのようなつながりがあるかを明らかにすることを目的とする。

まず、多くの場合「～始める」と交換可能な「～出す」が、命令・意志の文脈であらわれにくいこと、また、話者が知覚不可能な事態を表す文脈であらわれにくいことを観察し、このような「～出す」の意味が単なる起動ではなく、「話者によって結果が知覚可能な事態の生起」であることを指摘する。さらに、単独用法「出る」「出す」のイメージ・スキーマをもとにして、このような「～出す」の意味が、単独用法「出す」のイメージ・スキーマに対して適用されるいくつかの一般的な認知的操作による拡張の結果であると主張する。

## 1 理論的背景

0節で述べたように、本稿の目的は複合動詞構文における後項の意味の多様性と、その多様な意味と単独用法との関わりを、Lakoff(1987)とLangacker(1987/1991)で提唱された枠組みを用いて明らかにすることである。本節ではこれらの枠組みの中で本稿の分析に関与する点について概観する。

Lakoff(1987)は、一つの語彙項目の一見全く無関係に思われる多様な意義が互いに認知的に動機づけられた関係を持つことを示し、語彙項目を「意義の自然なカテゴリー」と捉えることができると主張した。Lakoff(1987)の分析は従来 of の枠組みとは異なる観点に基づいているが、その中でも特にここで述べておかなければならないのは次の2点である。

まず第一に、ある一つの言語形式が複数の統語範疇に渡って使用される場合でも、それらの「意義」を考慮することによって、それらの間のつながりを明らかにすることができるということである。Lakoff(1987)では 'over' の分析が行われているが、それは 'The plane flew over the hill.' のような前置詞としての用法だけでなく、'Roll the log over.' のような副詞、'overflow' のような接頭辞といった多様な範疇としてあらわれる 'over' を対象とし、それらの用法が一つのスキーマからの拡張

として統一的に捉えられると主張されている。この観点は、ある語彙項目をいずれかの決まった統語範疇に属するものとして捉えるような形式的なアプローチと対照をなしている。形式的アプローチにおいては、たとえ同じ言語形式であっても、異なった環境において異なった統語的振舞いをするならば、それらは基本的に「同音異義語」であり、異なった統語範疇に属する異なった語彙項目として扱わざるを得ない。Lakoff(1987)の枠組みでは、たとえその統語的振舞いが環境によって異なっても、それらの意味について考察することにより、一つの語彙項目の統一的な把握が可能であり、(少なくとも部分的には)その振舞いの違いを説明することができる<sup>2</sup>。

第二に、一つの語彙項目の複数の意義は、それらの意義のすべてに共通する抽象的な意味素性によってまとめられることができるようなものでは必ずしもないということである。Lakoff(1987)の 'over' の分析に関して言えば、例えば 'Do it over.' のような反復を表すものと、'The plane flew over the hill.' のような空間内の位置関係を表すものとがなんらかの共通の意味的な属性を共有しているとは考えにくい。また、仮に共通の属性を与えることができたとしても、そのような属性は余りに一般的なものになり、'over' のもつ本質的な意味的特徴に関して重要な洞察を与えることにはならないであろう<sup>3</sup>。したがって、語彙項目の複数の意義の関係を考察する場合には、個々の意義どうしの関係に着目し、Lakoff(1987)でなされているように、それらの間のつながりを明らかにするという方法論が有効になる。このような観点では、「意義の自然なカテゴリー」としての語彙項目は、中心となる一つの意義から、直接的あるいは間接的に拡張された様々な周辺の意義へと至るカテゴリーとして記述される。Lakoff(1987)は、このようなカテゴリーを「放射状カテゴリー」と呼び、あらゆるカテゴリーが放射状カテゴリーとして適切に記述できると主張する。放射状カテゴリーがカテゴリー一般の特徴であるならば、意義のカテゴリーである多義的語彙項目についてもこのような観点からの分析が有効であるはずである。

Langacker(1987/1991)の枠組みの中で特に述べておかなければならないことは次の2点である。まず第一に、言語の意味においては、視覚・聴覚・触覚に基づく感覚的イメージが重要な部分をなしているということである。従来の意味論においては、必要十分条件を規定する抽象的な素性の束として語彙の意味を分析する語彙分解の方法論が取られてきたが、このようなやり方には、様々な点で限界があることが多くの研究者によって指摘されている<sup>4</sup>。Langacker(1987/1991)は、そのような素性による語彙分解に代わりうる方法としてイメージ・スキーマによる表示を提唱している。イメージ・スキーマは事物・事態を統一的なイメージとして表示するものであり、事物・事態の構成要素は事物・事態全体の中でのみ位置付けられる。こ

のようなイメージ・スキーマを使うことによって、プロトタイプ効果、家族的類似性、放射状カテゴリーなどの問題を適切に扱うことが可能になる。

第二に、イメージ・スキーマは外界を忠実に反映するものではなく、人間が外界を知覚してそれを解釈するやり方に基づいているということである。人間が外界の事物・事態をありのままに知覚するのではなく、知覚された情報に対して様々な認知的処理を行う以上、それを記述する言語の意味もありのままの外界の事物・事態ではなく、話者の認知のあり方に基づいているはずである。したがって、イメージ・スキーマの表示の中には、話者の視点や注意の焦点などの主観的な情報が組み入れられることになる。

以下では、複合動詞後項、特に「～出す」について分析する。その際上述のような、主観的情報を含むイメージ・スキーマを使い、複合動詞後項という限られた統語範疇としてだけでなく単独用法としての意義も含めて、個々の用法の意義の間のつながりを明らかにするという観点から考察を進めることにする。

## 2 複合動詞後項に関する問題

本稿では複合動詞後項「～出す」について分析するが、その前に、複合動詞構文の一般的な特徴について前節で述べたような観点からいくつかの論点を指摘しておきたい。

複合動詞後項として用いられる動詞の特徴の一つは、それらが複合動詞後項としてだけでなく、単独で用いることができるということである。このことは複合動詞の定義上自明のことであり、複合動詞構文を日本語研究全体の中に位置付ける上で見逃すことのできない事実であると思われる。実際、単独用法と複合動詞としての用法の間の関係に関して、塚本(1987)、山本(1983,1984)では両者の格支配の分析がなされているし、影山(1993)では両者の項構造と語彙概念構造に着目した分析がなされている。

ただ、このような単独用法と複合動詞用法の間に関する研究は、この両者のつながりがかなり明白な場合に限られる。もし単独用法における動詞の特性と複合動詞用法における動詞の特性が全く異なっていれば、それらは単に同音異義語として扱われ、それらの間にどのような関係があるのかについては全く何も述べることができなくなる。例えば、(1)のような「～出す」は、単独用法によるパラフレーズもできず、単独用法の意味が前項動詞の意味に付け加えられているのでもないという点で、単独用法と複合動詞用法の間をつなぐを形式的に述べるということができない例である。

(1) 突然ベルが鳴り出した。

したがって、単独用法と複合動詞用法に関する形式的な研究は、(2a)と(2b)のようにこの両者がほぼパラフレーズの関係にある場合か、(3)のように複合動詞後項の単独用法における意味が前項動詞に単に付け加えられるような場合を主に扱うことになる。

(2)a. 一夫は勉強を続けた

b. 一夫は勉強し続けた

(3) 業者が荷物を部屋から運び出した

一方、単独用法と複合動詞用法の関係について意味論的観点からなされた研究は少ない。それは、(2-3)のような単独用法と複合動詞用法の間の意味的つながりがかなり明白な場合には、意味論的に考察するに値するような問題は何もないように思われるからであり、(1)のような全く意味的なつながりがないと思われる場合には、従来の抽象的素性に基づくような意味論では扱うことができなかったからである。

しかし、前節で提示した枠組みに基づけば、単独用法と複合動詞用法の間に一見何のつながりもないと思われる場合も適切に扱うことが可能になる。すなわち、主観的な情報を含むイメージ・スキーマを用い、単独用法と複合動詞用法の多様な意義の間関係に着目することによって、カテゴリーの成員の全てに共通する抽象的素性による分析では見出すことのできなかった複合動詞構文の特性を捉えることが可能になるのである。実際、齋藤(1985)では、ほぼイメージ・スキーマと同等の図式を用い、単独用法と複合動詞用法それぞれの多様な意義に着目することによって、複合動詞後項「～返す」の分析に成功している。前述のように、複合動詞構文の重要な特性は複合動詞後項として用いられる動詞が単独でも用いられるということであるが、前節で述べた枠組みはこれらの間関係を最も適切に捉えることができると思われる。

### 3 いわゆる起動を表す「～出す」の特徴

ここでは、複合動詞後項「～出す」の意味について、いくつかの現象を見ながら検討していく。「～出す」は様々な用法で用いられるが、本稿で扱う「～出す」は次の様なものである。

- (4)a. 雨が降り出した  
b. 健次は3日前にその本を読み出した

このような「～出す」は、一般に「～始める」と交換可能であり、その際に意味はほとんど変わらない。

- (5)a. 雨が降り始めた  
b. 健次は3日前にその本を読み始めた

このことから「～出す」は起動アスペクトを表すとされることがある。このような一般に「起動」を表すとされる「～出す」の用法をここでは仮に、「～出すA」と呼ぶことにする<sup>5</sup>。

上の例からは、「～出すA」と「～始める」は全く同義であると思われるかもしれない。しかし、「～出すA」と「～始める」の置き換えはどのような場合にもできるわけではなく、ある特定の環境において「～始める」が使用可能で「～出すA」が使用不可能な場合がある。例えば、「～始める」は命令形にすることができるが、「～出すA」は命令形にするとやや不自然になる。

- (6)a. すぐにその本を読み始めなさい  
b. ?すぐにその本を読み出しなさい  
(7)a. 早く食べ始めろ  
b. ?早く食べ出せ

同様の対立は、勧誘や文の主体の意志をあらわす文脈においても見られる。

- (8)a. すぐにその本を読み始めよう  
b. ?すぐにその本を読み出そう  
(9)a. 早く食べ始めよう  
b. ?早く食べ出そう  
(10)a. すぐにその本を読み始めたい  
b. ?すぐにその本を読み出したい  
(11)a. 早く食べ始めたい  
b. ?早く食べ出したい

上記の例とはやや性質が異なるものの、使役構文においても、同様に「～始める」

が使用可能で、「～出すA」の使用は不自然である。

(12)a. 先生が生徒に本を読み始めさせた

b. ?先生が生徒に本を読み出させた

(13)a. コーチが選手に走り始めさせた

b. ?コーチが選手に走り出させた

(6-11)のような「～出すA」と「～始める」の対立については、森田(1989)、姫野(1977)でも指摘されており、それぞれ「意志性のなさ」、「自然現象的性質」という観点から説明が試みられている。しかし、次節で見るようにこれらの説明には不明確あるいは不十分な点が見られ、そのまま受け入れることはできない。むしろ、ここで関与しているのは、話者の関与の有無である。すなわち、「～始める」が単なる事態の開始という意味を持つものに対して、「～出すA」が話者の視点から見て知覚可能な形での事態の生起という意味を持つと考えることができるのである。

「～出すA」がこのような意味を持つと考えられる一つの理由は、上記のような文脈における生起不可能性が、話者の判断や推論を表すモダリティ形式と平行的であることである。例えば、日本語の「らしい」「ようだ」「そうだ」などは、命令・意志・使役の文脈ではあらわれない<sup>6</sup>、英語の 'seem' や 'appear' などの動詞も命令・意志・使役の構文にはあらわれない<sup>7</sup>。このことは、モダリティ形式を含む文の話者が、命題が表現する事態に対して制御力を持っていないことに由来する。「～出すA」についても、話者は命題が表現する事態を知覚するだけであり、事態に対する制御力を持っていないため、命令・意志・使役の文脈であらわれにくいと考えることができる。

「～出すA」が話者によって知覚可能な事態の生起を表すと考えられるもう一つの理由は、次のような知覚不可能な事態の記述における「～出すA」と「～始める」の解釈の違いにある。

(14)a. 犬に咬まれて以来正夫は犬を恐れ始めた

b. 犬に咬まれて以来正夫は犬を恐れ出した

(14a)では「正夫の犬への恐れ」が表面的な行動にあらわれるか否かについては中立的であるが、(14b)では表面的な行動があらわれる解釈が優勢である。このことは、(15)や(16)のような文脈を与えればより明確になる。

- (15)a. 犬に咬まれて以来正夫は犬を恐れ始めて、子犬を見ても逃げるようになった  
 b. 犬に咬まれて以来正夫は犬を恐れ出して、子犬を見ても逃げるようになった
- (16)a. 犬に咬まれて以来正夫は犬を恐れ始めたが、そのことを私には隠していた  
 b. ??犬に咬まれて以来正夫は犬を恐れ出したが、そのことを私には隠していた

(16b)の不自然さは、「～出すA」が知覚可能な事態の生起を表さなければならないのに、文脈上そのような解釈が不可能であるという矛盾に由来している。

同様に知覚可能性が問題になる文脈として、(17)のような「～始める」と「～出すA」の対比がある。

- (17)a. ろうそくの火が消え始めた  
 b. ??ろうそくの火が消え出した

(17b)の不自然さも、やはり「～出すA」が知覚可能な事態の生起を表すということに由来している。ただし、ここで注意しなければならないのは、「ろうそくの火が消える」という事態が進行していく過程そのものは知覚可能であるということである。(14b)の「正夫が犬を恐れる」という事態そのものは、外的に知覚不可能でありうる。一方、(17b)の「ろうそくの火が消える」という事態は、外的に知覚不可能なものではありえない。したがって、(16b)と(17b)の不自然さを説明するためには、「～出すA」で問題になる知覚可能性が事態そのものについてではなく、事態が含意する結果についてのもと考えざるをえない<sup>9</sup>。

以上のことから、「～出すA」の意味は単なる起動ではなく、「話者によって結果が知覚可能な事態の生起」と規定することができる。以下では、このような「～出すA」の特性が単独用法「出す」とどのような関連があるかを考察していく。

#### 4 先行研究

複合動詞構文については、多くの研究者によって様々な観点から研究がなされているが、本節では「～出すA」の用法とその意味について言及のある森田(1989)と姫野(1977)を取り上げる。いずれの研究においても、鋭い直感に基づく観察がなされているが、森田(1989)では、「～出すA」の意味の規定の仕方にやや不明確な点が見られ、姫野(1977)では、単独用法と複合動詞用法の間のつながりの説明がやや

不十分な点が見られる。

#### 4. 1 森田(1989)の研究

森田(1989)は「『-出す』は無の状態、現れていない状態のものがおのずと顕在化し、動作・状態の変化として形をなすという気分が強い。”開始”よりは”新たな事態の成立”の意識が強い。」として、「～出すA」を含む文には「意志性」がないと述べている。

(18)a. 彼はいやいや歩き出した

b. あのテレビ番組を見だしてから、土曜の夜が楽しみになった

森田(1989)は、(18a)は他者の行為を叙す場合、(18b)は自身のことでも結果的に事実を叙す場合であり、自己の意志的判断である(19)は容認不可能であると述べている。

(19) \*そろそろ本を読み出そうか (cf. 読み始めようか)

森田(1989)の基本的見解は、前節で述べた「～出すA」の意味的な規定とほぼ一致するものと言えるが、森田(1989)で述べられている「意志性」が誰の意志であるかということは明確でない。(18a)で「いやいや」といった副詞が用いられていることからすれば、この「意志性」は主語に帰せられるとも考えられるが、次のように「自らの意志で」といった副詞に置き換えても容認度は変わらないから、「～出すA」の意味に文の主語の意志性が関わっているとは考えられない。

(20) 彼は自らの意志で歩き出した

また、「他者の行為を叙す」とか「自身のことでも結果的に事実を叙す」という言い方をしていることから推測すると、ここで問題にされている「意志性」は話者に帰せられるとも思われるかもしれない。しかし、(18)のような例において、そもそもなぜ話者の意志性が関わらなければならないのかに関しては全く説明されていない。

前節で述べたように、「～出すA」は「話者によって結果が知覚可能な事態の生起」を表すのであり、意志性のなさは(19)のような文脈においてはじめて問題になるにすぎない。もし(16)のような文においてなんらかの点で意志性のなさが感じら

れるとすれば、それは「～出すA」が含意する話者が知覚の主体であり、命題が表す内容自体に対して制御力を持たないからであろう。しかしいづれにせよ、森田(1989)で指摘されている「意志性」の問題は、「～出すA」の意味の本質的な特性ではなく、「話者によって結果が知覚可能な事態の生起」から派生的に導かれるものである。

#### 4. 2 姫野(1977)の研究

姫野(1977)は、複合動詞後項「～出る」と「～出す」について、多くのデータをもとにしてそれらの統語的・意味的な特徴を論じたものである。したがって、「～出すA」以外の「～出す」についても、多くの興味深い観察がなされている<sup>9</sup>。ここでは、本稿の目的上「～出すA」の用法と単独用法のつながりに関する姫野(1977)の見方について見ることにする。

姫野(1977)では、「『～出す』は『～始める』に比べて、より”自然現象的な”突発的な」というニュアンスが伴う」として、単独用法「出す」との連続性について次のように述べている。「内部にこめられていたものが、何かのきっかけでどっと外部へ出て、ことが始まるという状態は容易に想像されることである。そこには人為的な力の作用というよりは内部からあふれた自然なエネルギーの流出が感じられる。」として、「～出すA」と単独用法「出す」との間につながりがあるという見解を示している。

この見解は、単独用法と複合動詞用法の間になんらかのつながりがあるという本稿の観点と一致するものの、次のような問題点がある。まず第一に、姫野(1977)が述べているのは「出る」の基本義であって「出す」の基本義ではない。したがって、姫野(1977)の見方では、「～始める」と置き換えができるのがなぜ「～出る」ではなく「～出す」なのかという疑問に答えることができない。

第二に、姫野(1977)で述べられている単独用法の意義は、基本的な用法にすぎないということである。1節で述べたように、語彙項目の複数の意義は共通した属性によってまとめられるようなものではない。したがって、単独用法と複合動詞用法の間のつながりを問題にする場合、一つの基本的な用法を見るだけでは十分でない場合が多い。実際、姫野(1977)の指摘はかなり直観的なレベルにとどまっており、単独用法の意義と複合動詞後項の意義のつながりを十分に明らかにしたとは言えない。

本稿では、この2つの問題点を解決しうる分析を試みる。以下で詳しく述べるように、第一の問題点は主語の主観化という点から、第二の問題点は単独用法「出す」の中心的な意義だけでなく拡張された意義を考慮することによって、解決すること

ができる。

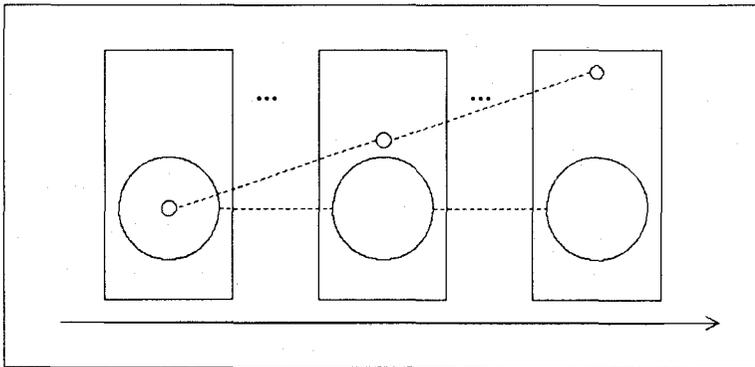
## 5 単独用法「出す」のイメージ・スキーマ

本節では、単独用法「出す」の基本的な用法である「外部への移動の使役」からどのようにして「ある地点における出現・発生」という意味へと拡張が行われるかということ、イメージ・スキーマによる表示に基づいて分析する。ここでは、「出す」のスキーマを、外部への移動のスキーマと使役のスキーマの複合と仮定する<sup>10</sup>。したがって、まず基本となる外部への移動のスキーマについて議論することにする。外部への移動のスキーマは、「出る」の基本的スキーマと一致するが、「出る」自体の様々な拡張されたスキーマについて網羅的に提示することはせず、本稿で扱う「～出すA」の分析に関わる部分のみを提示することにする。「出す」の様々な拡張されたスキーマについても同様である<sup>11</sup>。

### 5.1 外部への移動のスキーマから出現・発生のスキーマへの拡張

まず、外部への移動のスキーマを考える。外部への移動のスキーマは基本的に一つの「容器」と一つの「移動体」、そしてその間の位置関係の変化を示す時間軸からなる<sup>12</sup>。これらを含むようなスキーマは(21)のようなものになる。

#### (21) 外部への移動のスキーマ



このスキーマは、次のような「出る」の基本的用法のスキーマと同等である。

(22)a. 進は部屋から出た

b. ホースから水が出る

(22)の例は、いずれも(21)のスキーマにおける「容器」と「移動体」が明示的にあらわされている。(22a)に関して言うと、「進」のスキーマが(21)の「移動体」と同定され、「部屋」のスキーマが(21)の「容器」と同定される。この過程で「移動体」と「容器」が精緻化され、(22a)の文全体のスキーマが規定されることになる。一方、次のような例では、(21)のスキーマにおける「容器」が明示されない。

- (23)a. この寺にはお化けが出る
- b. あの界限には痴漢が出る
- c. 風邪をひいて熱が出る
- d. 列車事故でけが人が出る

(23)の例は、いずれも「容器」が明示されないという点で(22)とは異なっている。(23)の例において「出る」が表しているのは、「外部への移動」ではなく、むしろ「出現・発生」である。

このような「外部への移動」から「出現・発生」への拡張において関与しているのは、Lakoff(1987)の「メタファー的写像」であると考えられる。Lakoff(1987)は意味の拡張において、「イメージ・スキーマ変換」と「メタファー的写像」が重要な役割を果たしていると指摘している。イメージ・スキーマ変換の具体例として、'over'の意味の拡張における、次のようなイメージ・スキーマ変換を挙げておく。

(24) 終端焦点化変換

- a. Sam walked over the hill. (経路)
- b. Sam lives over the hill. (経路の終端)

(25) 複数個体・連続体変換

- a. The guards were posted all over the hill. (複数個体)
- b. The board is over the hole. (連続体)

終端焦点化変換は、経路を表すスキーマから経路の終端を表すスキーマへの変換であり、複数個体・連続体変換は複数個体を表すスキーマから連続体を表すスキーマへの変換である。Lakoff(1987)は、このいずれの変換も'over'だけに限らず、他の語彙項目の意味の拡張にも関与するという点で一般性を持っているが、この一般性が認知のあり方に基盤を持っていると主張する。

また、「メタファー的写像」の具体例としては、'over'の意味の拡張に関与する次のようなメタファー的写像が挙げられる。

(26) メタファー的写像:<支配力は上、支配力の欠如は下>

She has a strange power over me.

このようなメタファー的写像もまた、'over'の意味の拡張だけでなく他の語彙項目の意味の拡張にも関与しており、やはり認知的な基盤を持っている。

「出る」の外部移動のスキーマから出現・発生のスキーマへの意味の拡張には、次のようなメタファー的写像が関与していると考えられる。

(27) メタファー的写像:<公開されたものは外部、隠されたものは内部>

このメタファー的写像は、次のようなイディオムにおいて見られるように、「出る」の意味の拡張とは独立に存在するものである。

(28)a. 不祥事が表沙汰になる

b. 秘密が漏れる

(28a)では「表」すなわち外部であることが「公開性」と結びついており、(28b)では「秘密」が「(容器から)漏れる」ことがやはり「公開性」と結びついている。しかも、(27)のメタファー的写像は、日本語における意味の拡張だけでなく、他の言語における意味の拡張にも見られる。Lindner(1982)は、英語の'out'の意味の拡張において(27)と同様のメタファー的写像が存在することを指摘している。

(29)a. The stars/the sun finally came out.

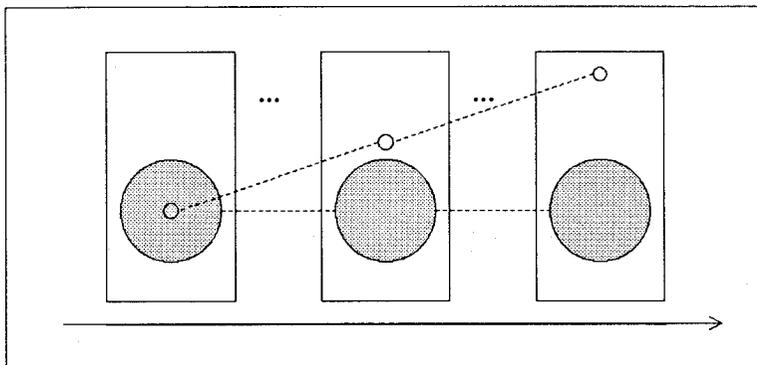
b. What did you find out?

c. He threw out a few ideas for us to consider.

(29)のいずれの例における'out'においても、「内部」が隠されたもの、「外部」が公開されたものと結びついている。したがって、(27)のようなメタファー的写像は「出す」の意味の拡張だけに限られない一般性を持っていると言える<sup>13</sup>。

(27)のメタファー的写像に基づいて、(21)の外部への移動のスキーマは、次のような出現・発生のスキーマへと変換される。

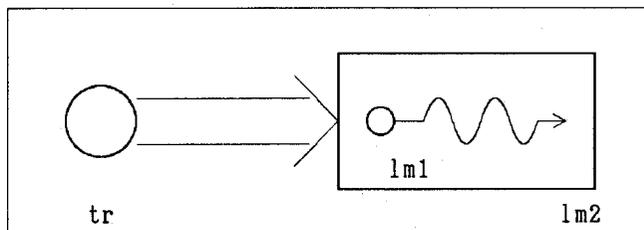
(30) 出現・発生のスキーマ



5.2 「出す」のスキーマ

前述のように、「出す」のスキーマは外部への移動のスキーマと使役のスキーマの複合であると仮定する。Langacker(1991)では、causative constructionのスキーマは次のように規定されている。

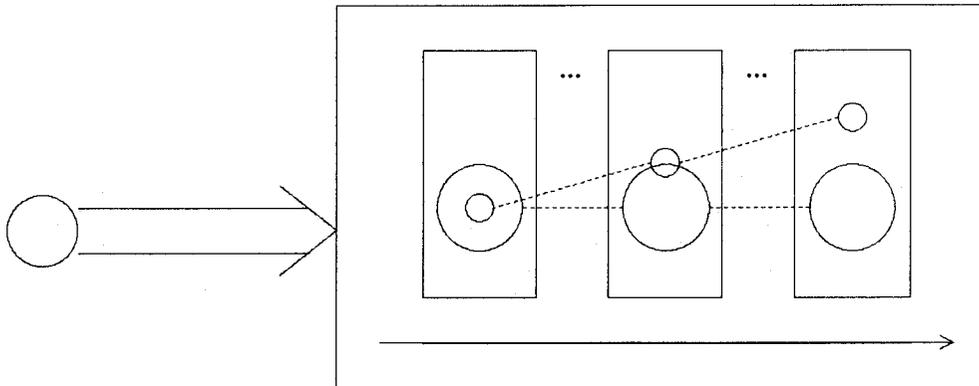
(31) causative schema(Langacker1991:410)<sup>14</sup>



(=>はenergy transferを示す)

簡単に言えば、このスキーマは一つの実体が事態に対してエネルギーを移行させることによってその事態を進行させるという事態であると解釈される。「出す」の場合には、エネルギーが移行される事態が「外部への移動」であるから、「出す」の基本的なスキーマは次のような「外部への移動の使役」のスキーマとして表示される。

(32) 外部への移動の使役のスキーマ



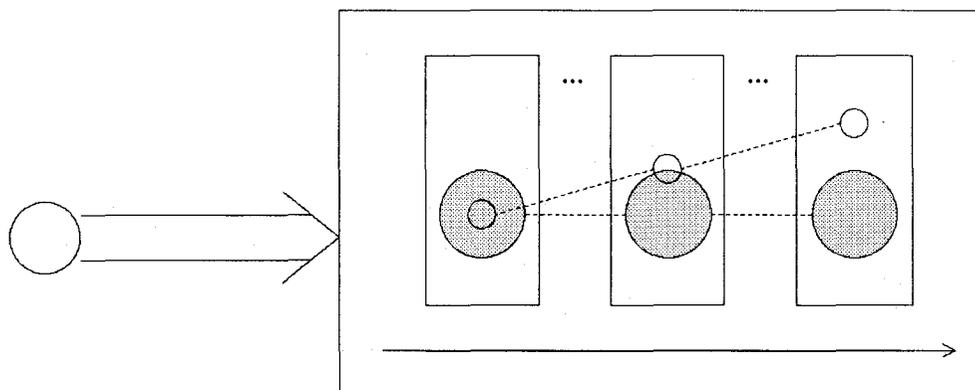
注意しなければならないのは、このスキーマは、「出す」が使われている文の意味の様々な詳細を捨象したものであるということである。例えば、このスキーマは causerの位置に関しては何の規定もしていない。(33a)では、causerの「一弘」は容器の「ポケット」の外にいて、移動体である「タバコ」に直接力を加えて容器の外へ移動させているが、(33b)では、causerの「昭子」は容器である「車」の中にいて力の行使を行っている、というように「出す」を含む個々の文はそれぞれの場合で、様々なスキーマをもっている。

- (33)a. 一弘がポケットからタバコを出した  
b. 昭子が車から手を出した

(32)のスキーマは、causerが容器の中に位置するのか外に位置するのか、causerが直接力の行使を行うのか、といったスキーマの様々な詳細をすべて捨象したものであり、そのような詳細が規定されたスキーマをすべて含むものである<sup>15</sup>。

(32)のような基本的スキーマに(27)のメタファー的写像が適用されると(34)のような出現・発生の使役のスキーマが得られる。

(34) 出現・発生の使役のスキーマ



(35)のような例が、(34)のスキーマによって表示される。

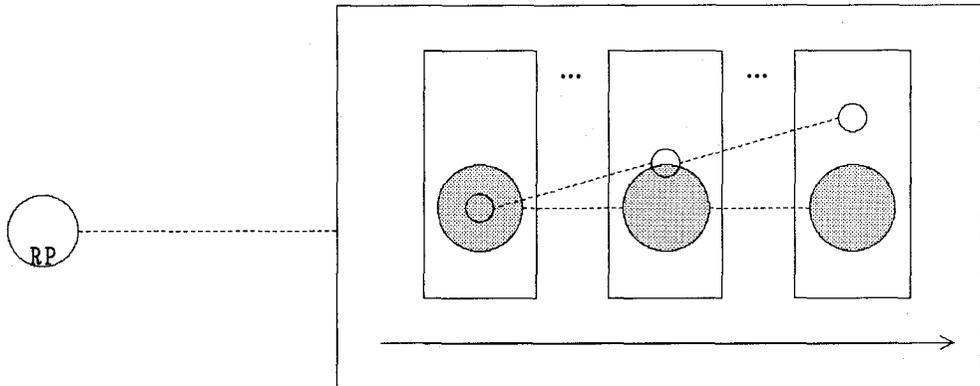
(35)a. 手品師が（なにもないはずの帽子の中から）鳩を出した

b. A大学はノーベル賞受賞者を10人も出した

c. あの家はこの3年で2回も火事を出した

ここで重要なのは、(35)におけるcauserがそれぞれやや異なった性質をもっているということである。(35a)では、causerである「手品師」は直接的な力の行使によって意図的に事態を進行させているのに対し、(35b)では、「A大学」は事態の進行に対して間接的な力しか持っていない。さらに、(35c)では、「あの家」はもはや事態の進行に対して直接的な力も間接的な力も持っておらず、事態が進行する場所にしかすぎない。したがって、出現・発生の使役のスキーマにおけるcauserには、典型的なcauserから事態が進行する場所に至る段階性があることになる<sup>16</sup>。(35c)のように、causerがもはや単なる場所しか表さないような「出す」のスキーマは次のようなものである。

(36) ある場所における出現・発生<sup>17</sup>

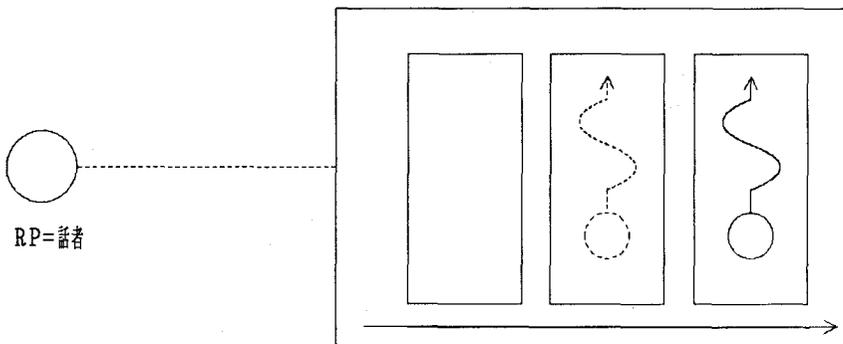


このようにして、「出す」のスキーマが「外部への移動の使役」から「ある場所における出現・発生」へと拡張される過程を明らかにすることができた。この過程で関与しているのは、メタファー的写像と複数のスキーマの複合である。これらはいずれも「出る」と「出す」の意味の拡張に限られるような特異的な過程ではなく、他の言語現象にも適用される一般的な過程である。

6 「～出すA」のスキーマ

3節で述べたような、「話者によって結果が知覚可能な事態の生起」という「～出すA」の意味は次のようなスキーマによって表示される。

(37) 話者によって結果が知覚可能な事態の生起のスキーマ



このスキーマは、前節の(36)のスキーマと密接な関連がある。すなわち、(36)に対する(37)のスキーマの相違点は、i)参照点が常に話者の存在する空間として解釈さ

れること、さらに、ii)生起する実体が事物でなく事態であることのみである。したがって、(36)のスキーマから(37)のスキーマへの拡張を動機づけるには、この2つの相違点が説明されなければならない。

第1点に関しては、Langacker(1991)で指摘されている主観化(subjectification)が起こっていると考えられる。主観化とは、本来客観的な事態を表す言語形式が話者の視点や発話時点などの主観的な要因を含む意味へと拡張される意味変化の過程である。Langacker(1991)では、英語の 'have' の多様な意味の間のつながりについて分析がなされている。(38)のそれぞれの例は 'have' を含んでいるが、(38a)の 'have' は動作的・完了的・意志的な事態を意味するのに対して、b以下の例ではそのような特性が次第に失われていき、(38e)では、'have' の主語は空間的な参照点としての機能しか持っていない。

- (38)a. The duchess had the gardener trim the hedges.
- b. The robber had a gun in his hand.
- c. Brygida has a new chainsaw.
- d. Sally has a dog.
- e. We have a lot of skunks around here.

Langacker(1991)は(38e)のような空間的参照点の機能がさらに時間的な参照点の機能へと拡張されたのが(39)のような現在完了の 'have' であると主張する。

(39) The water main has broken!

このようにして、'have' の語彙語としての意義と機能語としての意義が主観化という観点から結び付けられ、その間のつながりが動機づけられることになる。

「～出すA」に関してもこれと同様の意味の拡張が起こっていると考えることができる。(36)のスキーマにおける参照点は主観化を受けて話者が存在する空間として常に解釈される。ただし、'have' の例とは異なり、「～出すA」のスキーマは、話者の時間的な位置付けが参照点として解釈されるまでには至っていない。もしそのような拡張が起こっているとすれば、3節で挙げたような「～出すA」と「～始める」との対比はありえないからである。したがって、「～出すA」の場合には、参照点の性質は(36)のスキーマにおける参照点の性質と同じく、空間的な参照点であると考えられる。

また、第2の点である事物の生起が事態の生起へと拡張されるということも、自然な意味の拡張と言える。一般に、ある実体が事態として認知される場合には、そ

の参加者の時間的推移による変化の仕方に焦点が置かれる。一方、ある実体が事物として認知される場合には、時間的推移による変化は捨象され、ある認知枠（空間的位置、他の実体とのパラダイグマティックな関係など）の中でのその実体全体の位置付けに焦点が置かれる。したがって、時間的推移によって変化する実体は、その参加者の変化のあり方と実体全体のいずれにも自由に焦点が置かれうるのである。このような焦点の置き方による違いは、名詞化や補文化のような言語過程に反映されている。したがって、「出す」から「～出すA」の拡張過程においても、焦点が参加者間の関係の時間による変化から、その変化のあり方全体に移るという過程が起こると考えても不自然ではない。

## 7 結語

本稿では、「～出すA」の意義が、単独用法の基本的意義である「外部への移動」から拡張されている過程を明らかにしてきた。その際、イメージ・スキーマとそれにかかるメタファー的写像、主観化が中心的な役割を果たしていることを指摘した。「～出すA」の意義である「話者によって結果が知覚可能な事態の生起」は、次のような過程を通して拡張される。まず「外部への移動」のスキーマと使役のスキーマの複合が起こり、それに対して〈公開されたものは外部、隠されたものは内部〉というメタファー的写像が適用されることによって、「出現・発生の使役」のスキーマが形成される。そして、causerの役割が衰退し、参照点となることによって「ある場所での出現・発生」のスキーマが得られる。さらに、そこに主観化と焦点の置き方の変換が起こることによって、「話者によって結果が知覚可能な事態の生起」という「～出すA」のスキーマが形成される。この拡張の過程に関与するそれぞれの操作は、単に「～出すA」だけに見られるような特異的な操作ではなく、一般性をもった操作である。

最後に、残された問題点について整理しておきたい。まず、本稿では「～出すA」についてしか扱えなかったが、ここで提示した分析方法が他の複合動詞後項にも適用可能かどうかという問題がある。複合動詞構文では、様々な種類の動詞が様々な意義を持って使われるから、それら全ての動詞について単独用法も含めた詳細な意義の記述を行うのはかなりの困難が伴う。しかし少なくとも、比較的生産性の高い「～かける」「～つける」などの分析に対しては、本稿の方法は重要な示唆を与えると考えられる。これらの複合動詞後項は単独用法でほとんどが他動詞であり、しかもなんらかの意味で話者が関与する一種のモダリティ要素である。「～出すA」の分析からも分かるように、この2つの要因はcauserの主観化という点から統一的に説明できる。

また、本稿では「～出すA」以外の「～出す」については扱えなかったが、「～出す」の形式について詳しい分析がなされれば、単独用法「出す」と複合動詞後項「～出す」の多様な意義について、より統一的な理解が得られると思われる。語彙項目が、Lakoff(1987)が主張するように、「意義の自然なカテゴリー」であり、それぞれの意義が互いに結びつけられた放射状カテゴリーをなしているとすれば、「～出すA」以外の「～出す」の意義が「～出すA」の意義に結びついている可能性も高い。

その他にも、意味拡張の過程で関与するそれぞれの操作について、十分に一般性があることをさらに示していくこと、「～出すA」のより詳しい用法<sup>1b)</sup>についての分析を進めていくことなどが問題点として残されている。いずれも今後の課題としていきたい。

## 注

- 1 ここで言う「複合動詞構文」とは、2つの動詞連続V1 + V2においてV1が連用形になるものである。V1がテ形で用いられる「～ていく」「～ておく」などについては現在のところ考察を行っていないが、本稿で提案する方法で分析可能であると考えられる。
- 2 例えば、'Roll the log over.'のような副詞的'over'は、'The plane flew over the hill'のような前置詞的'over'からの拡張であるが、この拡張の過程ではたらいっているのは'over'のlandmarkがtrajectorと同一化されるイメージ・スキーマ変換である。Lakoff(1987)はLindner(1982)に従って、landmarkがtrajectorと同一である場合をreflexive trajectorと呼んでいる。このように'over'が前置詞と副詞という異なった統語範疇に属することはイメージ・スキーマ変換という認知的な過程によって説明される。
- 3 同様の議論はTaylor(1989)でも、ロシア語の格の分析についてなされている。
- 4 語彙分解の問題点に関しては、Lakoff(1987)、Taylor(1989)で詳しく論じられている。
- 5 この他にも、複合動詞後項としての「～出す」は「運び出す」のような移動の方向を表す用法もあるが、本稿ではこの用法は扱わない。もちろん、移動の方向を表す「～出す」の中にも多くの興味深い用法が見られ、そのような用法も本稿で提示した枠組みの中で適切に扱えると考えられる。一つ例を挙げれば「腹が突き出している」における「～出す」はLakoff(1987)で指摘されたreflexive trajectorの例であり、landmarkである「腹」が同時にtrajectorとしても機能

していると考えられる。

- 6 これらの形式は、そもそも命令形を持たないからこのような文脈であらわれないと思われるかもしれないが、「君はそろそろ先生から呼び出しをくろうらしい」を「\*そろそろ先生から呼び出しをくろうらしくあれ/くろうらしくしろ」のような迂言的な方法で命令文にすることもできないから、単なるパラダイムの問題ではなく意味論的な問題が関与していると考えられる。
- 7 影山(1993)は、「～出すA」を含む構文を、繰り上げ動詞構文のように外項に $\theta$ 役割が付与されない非対格型補文構造に分類している。また、同様に非対格型補文構造をとるとされる「～かける」について、「『小坊主が鐘を鳴らしかけた』という文は、『小坊主が鐘を鳴らす』という事象が今にも起こりそうだったことを傍観者の立場から描写している」(影山1993:143.下線引用者)と述べている。即断はできないものの、非対格型補文構造をとる動詞が、意味論的に見て一般に話者のなんらかの形での関与を含意するとすれば、これらは統語的にも意味的にも一つのクラスをなしていると考えられる。
- 8 ここでは、一本のろうそくの火が徐々に消えていくような事態を意図している。複数のろうそくが次々と消えていくという事態を表す場合には「消え出す」の形式を使っても容認可能である。これは、前者の事態が火の完全な消滅を含意しているのに対し、後者の場合には火が最終的に消滅してしまうことを含意していないからと考えられる。なお、一般に事態の起動や漸進を表す形式が複数の事態の継起を表すこともできるという現象に関しては、Lakoff(1987)で指摘された「複数個体と連続体のスキーマ変換」が関与していると考えられる。
- 9 例えば、「～出す」が外部移動の意味で使われ前項動詞が自動詞の場合には、多くの「～出す」が「～出る」と置き換えが可能であるという現象が指摘されている。
  - (i) 水が飛び出す/飛び出る
  - (ii) 模様が浮き出す/浮き出るこのような「～出す」と「～出る」の交換可能性については、複合動詞後項の「～出す」の個々の意義の間のつながりを考察する上で重要な論点になると思われる。
- 10 この仮定は作業仮説であり、このように仮定する理論的な要請もデータ上の根拠も今の段階ではない。しかし、後に見るように、このように仮定することによって、基本的な「出す」の意義から「～出すA」の意義への拡張が適切に分析される。
- 11 「出る」についても「出す」についても、外部移動から拡張された様々な用法

が見られる。一例を挙げると、「下手に出る」のようなある種の態度を表すような用法がある。これは、後述のような「accessibleな領域への移動」の一種と考えることもできるが、「下手」がなんらかの移動先と考えることにはやや無理があるということ、「\*下手に出す」のような対応する「出す」の形がないことなどからやや特殊化された例であると考えられる。

- 12 Langacker(1987/1991)では、時間軸が明示されたスキーマと時間軸が捨象されたスキーマが使い分けられている。これらはmental scanningの違いを表すもので、前者がsequential scanning、後者がsummary scanningと呼ばれる。本稿で扱う現象にはscanningの違いは関与しないので、summary scanningのスキーマを使っても特に問題はないが、ここではsequential scanningのスキーマを使うことにする。
- 13 (26)のようなメタファー的写像の一般性は、容器のスキーマの認知的基盤に基づいていると考えられる。Lakoff(1987)は、容器に対する人間の理解は、自己の身体を容器として捉えることに基づいていると主張する。自己の身体が容器であるならば、その外にあるものは自己には属さない公のものであり、その中にあるものは自己に属する私的な隠されたものであるということになる。
- 14 'tr'はtrajector、'lm'はlandmarkの略である。Langacker(1987/1991)では、trajectorとlandmarkは、あらゆるrelational predicationにおいてそれぞれ最もsalientなものと2番目にsalientなものとして規定される。例えば、移動するものと移動の起点・終点、主語と目的語などがそれぞれtrajector、landmarkとされる。これは、心理学的には'figure'と'ground'に対応するものとされる。
- 15 したがって、ここではLakoff(1987)が言う「最小規定解釈」の立場に立っていることになる。Lakoff(1987)は「最小規定解釈」の問題点を指摘して「最大規定解釈」の立場の優位性を主張しているが、これはその語彙項目の多義性をよりよく記述できるかどうかという経験的な問題であり、理論上の問題ではない。したがって、「出す」に関してどちらの立場がより有効であるかは、その多義性をより詳しく観察して行く過程で決定するしかない。後に見るように、少なくとも「～出すA」と単独用法「出す」との関係を考える上では、「最小規定解釈」のほうがより有効であると考えられる。
- 16 このような段階性がどのような具体的要因によって生じているかは、現在の段階では明確にすることができなかった。少なくとも言えるのは、causerが、事態に直接的に力を行使すること、力の行使が意志的に行われることなどの複数の要因と、その要因に関する含意（直接力を行使するためにはその事態が起こる場所にいなければならないということ、causerは意志を持ちうるものでなけ

ればならないということなど) からなるカテゴリーであり、その結果プロトタイプ効果が現れるということである。

17 RPはreference pointの略である。

18 例えば姫野(1977)では、「笑う」「泣く」などの感情の表出を表す動詞には「～始める」ではなく「～出すA」が使われやすいことが指摘されているが、本稿の枠組みにおいてこのような現象をどのように扱えるかは考察中である。

《参考文献》

- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.
- 斎藤倫明(1985)「複合動詞後項の接辞化－「返す」の場合を対象として－」『国語学』140集.
- 定延利之(1991)「SASEと間接性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』所収. くろしお出版.
- 塚本秀樹(1987)「日本語における複合動詞と格支配」『言語学の視界－小泉保教授還暦記念論文集』大学書林.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版.
- 姫野昌子(1977)「複合動詞『～でる』と『～だす』」『日本語学校論集』4号. 東京外国語大学附属日本語学校.
- 平塚徹(1992)「出る・出す－その多義性の分析－」京都言語学コロキウム発表要項.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店.
- 山本清隆(1983)「複合語の構造とシンタクス」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究－5』情報処理振興事業協会.
- 山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』21号.
- Chafe, W. and J. Nichols(eds.)(1986) Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology. Ablex Publishing Corporation, Norwood.
- Croft, W.(1991) Syntactic Categories and Grammatical Relations - The Cognitive Organization of Information. The University of Chicago Press, Chicago.
- Heine, B., U. Claudi and F. Hünemeyer(1991) Grammaticalization - A Conceptual Framework. The University of Chicago Press, Chicago.
- Lakoff, G.(1987) Women, Fire and Dangerous Things - What Categories Reveal about the Mind. The University of Chicago Press, Chicago.
- Lakoff, G. and M. Johnson(1980) Metaphors We Live by. The University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, R.(1987/1991) Foundations of Cognitive Grammar 2vols. Stanford University Press, Stanford.
- Lindner, S.(1982) "What Goes Up Doesn't Necessarily Come Down: The Ins and Outs of Opposites." Papers from the Eighteenth Regional Meeting. Chicago Linguistic Society, Chicago.
- Sadanobu, T.(1993) "The Role of Pragmatic Factors Concerning Synonymous Relations." 第4回国際語用論会議発表要項.

- Sweetser, E.(1990) From Etymology to Pragmatics - Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure. Cambridge University Press, Cambridge.
- Taylor, J.(1989) Linguistic Categorization - Prototypes in Linguistic Theory. Oxford University Press, Oxford.
- Traugott, E. and B. Heine, eds.(1991) Approaches to Grammaticalization 2vols. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Traugott, E. and E. König(1991) "Semantics-Pragmatics of Grammaticalization Revisited." In Traugott and Heine(1991).

(いまい しのぶ、博士後期課程)